

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

教授 三科 貴博

1. 教育の責任

1-1. 主に2,3学年の専門必修科目を担っている。(後記一覧表参照)理学療法学コースの履修規定では専門必修科目の落第によって後期各学年に配当されている(2年生:検査測定実習,地域理学療法学実習 3年生:評価実習)の臨床実習科目は履修することができない。(健康科学大学2024年度版「学生便覧」P102~P103参照)

その前提条件となる科目を担当することは,臨床実習を履修するにふさわしい知識・技術・人間性を兼ね備えた学生を養成せねばならず,知識の教授には最大限の努力と効率性が求められると共に,成績判定には臨床実習前の関門となるに相応しく妥当性が求められる。

1-2. 担当する科目は高齢者と介護保険関連分野であり病院勤務を職業フィールドとしてイメージしている多くの学生には関心が薄い分野である。しかし,厚生労働省が2025年より全国で稼働している「地域包括ケアシステム」に対する理学療法士の参画を期待するならば,一人でも多く当該システムの理解と誕生のプロセス及びシステム内での理学療法士の活躍の場(活動の立ち位置)を考察できる学生を養成しなくてはならない。

そもそも「地域理学療法学」が新科目として創設された背景を鑑みるに,退院後の生活期にこそ人生の重点が置かれる退院患者のサポートの重要性を見出せる「気づき」を学生に促していかなくてはならない。

1-3. 新カリキュラムで新たに創設された「地域理学療法学実習」では介護保険関連に関する理解と参画が学習目標として掲げられている。全実習の1/2は医療関連施設での履修が推奨されている臨床実習において専門的に介護保険分野に関わることができるとは貴重である。実習施設との協働の中で健康寿命の延伸と生活期のQOLの向上を理学療法士の視点でとらえることがどの程度できるか,社会保障医費を削減する社会情勢の中において学修する意義は大変重い。

2023年度

科目名	時期		受講者
理学療法管理学	前期	15回必修	3年生 61名
小児理学療法学	前期	5回必修	3年生 61名
予防理学療法学	前期	5回必修	3年生 61名
基礎演習 I	前期	15回必修	1年生 14名
地域理学療法学	後期	15回必修	2年生 65名
リハビリテーション特別講義 II	後期	2回選択	3学科1~3年 69名
検査・測定実習	後期	45時間必修	2年生 65名
地域理学療法学実習	後期	45時間必修	2年生 65名

2024 年度

科目名	時期		受講者
理学療法管理学	前期	15 回必修	3 年生 65 名
小児理学療法学	前期	5 回必修	3 年生 65 名
予防理学療法学	前期	5 回必修	3 年生 65 名
基礎演習 I	前期	15 回必修	1 年生 12 名
地域理学療法学	後期	15 回必修	2 年生 59 名
リハビリテーション特別講義 II	後期	2 回選択	3 学科 1~3 年 69 名
検査・測定実習	後期	45 時間必修	2 年生 59 名
地域理学療法学実習	後期	45 時間必修	2 年生 59 名

1-4 授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。(2024 年度についてのみ)

- 1) 県内公立高等学校にて介護職員初任者研修講師
- 2) 国家試験対策委員会 委員長 (健康科学部のみ)

1) 主に福祉健康系列を擁する高等学校に赴き介護職員の養成にかかわる講義を行っている。高等学校側の教育カリキュラムを一部分担う形になっているが、中等教育における最終段階にある学生が対象となるため年度毎の高校生の雰囲気、気質、修学に対する熱意など留意して観察している。講義目標を達成することは勿論であるが、学生の習熟度を都度見極め教育内容の伝達方法を臨機応変に対応するなど自己の教育方法の自己研鑽にも傾注している。

2) 学部内の各学科、各コースの連携を図りつつ受験生の学修に最適の環境を提供できるよう議論を重ねている。最終的な決定は各学科、コースに帰するが委員会独自のアンケートを毎年実施し、より学生本位の立場で受験対策に学生の意見を反映できるように各学科に提案すべきは提案して学生のモチベーションを下げることなく国家試験合格率の向上に向けて情報共有を行っている。

2. 教育の理念・目的

本学の建学の精神は「豊かな人間力」「専門的な知識・技術力」「開かれた共創力」の 3 つの力を兼ね備えた人材育成として以下のディプロマポリシーを掲げている。

- (1) 生命に対する深い理解力,人権を尊重する高い倫理性,他者を思いやる豊かな人間性を身につけている。
- (2) 専門的な知識・技術力とそれを活かすための幅広い教養を身につけている。
- (3) QOL (Quality of Life) の重要性と多様性を理解し,全人的な視点から支援すること

ができる。

- (4) 関連職種と協働しチームの一員として役割を果たすためのコミュニケーション能力を身につけている。
 - (5) 様々な課題に対応できる社会人としての基礎力を身につけている。
 - (6) 社会の変化や技術の進展に対応でき、自己研鑽する力を身につけている。
- (健康科学大学 2024 年度版「学生便覧」P5 参照)

2-1. 私自身の教育の理念：自利利他の精神

本学ディプロマポリシーの冒頭にもあるように医療職の養成として、いかに相手の立場に立って物事を考えることができる人材を育成するかが重要である。自我の確立が命題である年代において自我同一性の確立と並行して他者を思いやる行動を習慣化することは自己の確立に余念がない学生においてはその分困難を伴う行動変容である。しかし、この点について思い至らぬまま利己的な行動に終始してしまうようでは就職できたとしても患者から信頼されることはなく、チーム医療においても軋轢を生んでしまう事は明らかである。他者を思い尊重し、他者のために働くことでやがてそのことが自分に良い形で戻ってくることを疑念なく思い至ることができる人材を育成したいと考えている。

2-2. 俯瞰的視点での思考

本学ディプロマポリシーにて掲げている「幅広い教養」、「全人的視点」、「社会人としての基礎力」いずれのキーワードも狭小な視点では叶うはずもなく、いかに多角的な観点で物事を観察・把握・分析できるかその能力が必要となる。今般情報過多ともいえるインターネットが発達した社会の中で SNS 等を中心に氾濫する玉石混交の情報の中から真に有益な情報を選択できることが第一歩となるであろう。信じたいものだけを信じる人間の特性をふまえ、あまたの情報の中から真質を見極め取捨選択できるためには、情報の海に埋もれるのではなく（平面で情報を捉えるのではなく）、俯瞰的な立場（いわゆる立体的な観点で）で情報を整理する習慣をつけてもらいたい。まずは与えられた情報（講義内容も含めて）を疑い、エビデンスが保証されているかを確認し、帰納的に信じられるであろう情報を蓄積していく学修を進めていく。情報社会においてリテラシーは当然のこととしてその収集力、発信力、俯瞰的思考で情報を選択できる能力は社会を生きていくための武器になると考える。

3. 教育の方法

前提として担当科目における各回の学修目標を設定する（各講義シラバスを参照）。その際には必ずそのカテゴリーで国家試験に出題された内容を含めるよう留意する。必ず講義開始時に学修目標に関連する国家試験過去問題を 1～2 題提示する。冒頭 5 分はこの時間に充て最後の 10 分間はまとめとして冒頭出題した国家試験問題を再度提示し、

その正答率をもって形成的評価とする（ブルームの3つの教育的評価参照）。

現状学生の基本的気質としてTP（タイムパフォーマンス）には留意し、短時間で効率よく押さえて欲しい学修項目の理解を促す。一例としてシラバスで掲げた1回分の学修目標をさらに細分化し（5～6項目）、1項目10～12分程度で要点をまとめなぜ必要な知識なのかその他の項目相互の関係から理解を促す（できれば知的好奇心を促す発問を加える）。このサイクルを5～6回反復し飽きさせることなくボトムアップした上でまとめの形成的評価を行い、成功体験を促していく。

基本的に初等・中等教育で実践されている学習指導過程を参考に学習指導案を策定し実践する。学生の学修活動、発問とそれに対する反応をあらかじめ予想し講義全体のタイムスケジュール（講義進行のシナリオ）を策定し講義内容と形成的評価がズレないようあらかじめ確認した上で実践する。

4. 教育の成果・評価

・理学療法管理学（3年次 前期）：教育内容は業務内容に関するものが大部分を占めるため、学生自身にとっては就職してからのことを学ぶため多少関心は薄れる傾向にあることは否めない（約2年後に役に立つ内容であるため…）。関心を持って授業に臨んでもらうために、厚生労働省や公的機関から公開されているデータを多く用いて事実をもとに未来を予想するような内容構成に努めている。この手法により現状では他人事の学生も近未来の予測を立てることでその予測が自身にとって有益か否か考察する機会となり、また否定的な未来予測になってしまうならばどうすればその結果を回避できるか自身の将来に真剣に向き合う機会となっている。抽象的な情報、ましては情報源が不明確な伝聞では学生の知的好奇心を刺激することはできないが客観的なデータを提示しそのデータの深読みをすることで何が見えてくるかを知らしめることで知的好奇心を刺激するよう工夫している。学生自身は深く考えること…に慣れていないため講義の初回の方ではうまく意見をまとめられないが、後半になるとヒントは必要であるがこちらが意図する気づきに触れることができるようになっていく。学生からの評価ではスライドの提示方法に意見がつくことがあるが（スライドの進行が遅い、説明が長い…など）、全体的にはデータの見方、公開されている数字の裏に潜んでいるもの、その数字から未来予測も可能なことを知るとおおむね好評を得ている。（個人的には自分で考え能動的に情報を分析し考察し最良の選択肢の選択ができる…社会人としては当たり前の能力…对患者さんにおいても同様の行動ができるような理学療法士の養成が一人でも多く増やしたいと考えている）

5. 今後の目標

短期目標：客観的に自身に不足している知識・技術を認識でき、卒業までにその不足を補う対策を構築し実践できる学生の養成

青年期の課題でもあるが自己同一性の確立とともに職業倫理、職業志望の動機の再確認が必要となってくる。当然ではあるがこの再確認が不十分であると国家試験対策および就職活動へのモチベーションが低下してしまう。先にも記したが公開されたデータを基に理学療法士の置かれた現状を客観的に把握するとともに将来起こりうる現象を俯瞰的に予測する練習を反復することにより現在自己に不足している要素を意識し不完全な自己に危機意識を芽生えさせることができると考える。危機感を覚えれば自ずとより完全に近い形での就職を望み在学中の自己研鑽に励むことになるであろう。

長期目標：理学療法士としての社会的使命を認知し、地域社会や住民から必要とされる人材の育成 学生自身は理学療法士免許を取得することが人生の目標となっているが、国家試験合格後就職してからは理学療法士という職業は経済的に自立する手段であり、その先に人生の目標を設定しなくてはならない。人生をより良くするための手段としての職業として理学療法士の存在をどう捉え理想とするか、確固たる理想型を形成するためには長期的な教育が必要で卒前教育と就職後の卒後教育がパッケージとして提供されることにより形成されるものであると考える。社会人となり社会のこともある程度経験し、学生の時にはわからなかったことがわかるようになる時期が来る。基礎的な知識が定着した時にこそより発展的な自己成長を促すことができるのであれば、理学療法士の社会的使命は就職してからでなくては実証的に体験できず、どのように任務を全うする（地域住民の要請に応える）かも長期的観点から教育を行っていく必要があると考える。